

メディアアート源流90点

霧島アートの森 ナムジュン・パイク展開幕



ブラウン管テレビを使った作品について説明を聞く来場者
11月6日、湧水町の霧島アートの森（北村茂之撮影）

多くの作品を所蔵するワタリウム美術館（東京都）の和多利浩一CEOは「テレビ画像をゆがめ、抽象化する表現で世界に衝撃を与えた。時代を先取りした預言者のような作家であり、メディアアートの源流に触れてほしい」。松陽高校2年の上村遙さんは「異質なものを組み合わせた作品は新鮮。テレビのノイズも表現になっている」と驚いていた。

テレビを題材にしたビデオアートの創始者として知られる現代美術家の軌跡をたどる「ナムジュン・パイク展（鹿児島県文化振興財団、南日本新聞社など主催）が6日、湧水町の霧島アートの森で始まった。パイク（1932〜2006年）の手掛けたインスタレーション（空間造形）やタレーシオン（空撮）や映像、絵画など約90点が並ぶ。積み重ねたブラウン管テレビに映像を流したり、植物とテレビを組み合わせたようなインスタレーション、パフォーマンスを世界同時配信した「サテライト・アート」など代表作がそろそろ。

12月3日まで（月曜休園、祝日の場合翌日）。一般800円、高大生600円、小学生400円。歌手・城南海さん招いたイベント（11月1日）やパイクにまつわる音楽コンサート（5日）などを予定する。（桐原史朗）